パスカルにおける ≪Honnête Homme≫について

竹下春日

I パスカルの ≪honnête homme≫ の歴史的由来

パスカルは≪パンセ≫の一断章（後出の fr. 34 参照）において，≪gens universels≫なるものについて語っている。このものは彼が fr. 36 において述べている≪honnête homme≫と同類のものであるが，前記の fr. 34 について，ブランシュヴィックはわれわれのためにコレの所説を紹介している。すなわちコレは，パスカルの断章と Chevalier de Méré の次の叙述との類似を指摘しているのである。Méré は次のごとく述べている——「戦争の技巧というものは世の中で一番素晴らしい技巧だ。これは認めざるをえない。だが良い意味で，honnête homme は技巧というものを少しも持たないのだ。彼は一つのことを知り抜いてはいるが，これで暮しを立てざるをえない場合でも，その振舞とか噂さというものは少くも人の口にはのぼらないように，そう私にはおもわれるのだ。」(1) Méré はまた次のようにも述べている。「様子から察して玄人と見られるのは，honnête homme にとっては迷惑なことである。だからこんな嫌な目に遇ったとき，彼はなんとかしてでもこうしたことから御免蒙らざるをえないのだ」(2) と。だがブランシュヴィックによれば，Méré のこうした≪honnête homme≫の観念の根底には，すでに Montaigne の次の思想がみられるのである。すなわち『随想録』中において，次の諸文章に接するのである——「ところで，我々がここで作り上げようとしておるのは，それとは逆に，文法学者や論理学者の輩ではなく，一個の gentilhomme なるものである。」（第1巻26章）「素朴なる百姓らは honnestes gens である。哲学者らも（当世風に言うなら，もろもろの有用なる学識を具えた，有能にして明敏なる資質ある人々も），honnestes gens である。」（同巻 54 章）<honnête homme> なる言葉ではなく，その概念ないしその人間像の形成の歴史も追究するとき，われわれはダンヂエールとともに，16 世紀におけるイタリヤの Gastiglione および Guazzo の

時代まで遡らねばならないのである。Gastiglione は後に <honnête homme> と呼ばれるようになる人間像を次のように描き出している。つまりかかる人物は，貴族にぞくし，武術に長け，鄭重優雅に振舞うとともに，話術・文筆・識見に長じ，他人を傷けるごとき冗談は避け，こうして王侯の友誼を獲得すべきものなのである。このポートレートにあっては，精神的美徳の占める部分は少なく，宗教性は欠如に近い。これはもうすでに laïcisme と言いうるものである。Guazzo になると，もう信仰心を示さない。彼にあっては，会話が目的となる。すなわち，礼儀正しく賞讃に価する誠実にして高雅なる会話が，これである。上品に発音しながらも己れの語調に陶酔することなく，真摯忠実であって知識を立派に披瀝すること，またこれを衒うことなく温順柔和にして慇懃謙虚であること，こうしたことが守るべき手本であって，もし人が「会話の真の賜物である他人の好意を得よう」とするなら，これこそ遵守すべきものなのである。次にかの高名なる Montaigne もまたここに登場して，宗教の参与や教育を説く。彼は独断論および衒学者たることを回避し，理性の尊重と精神の独立，かつまた中庸に対する愛好とを教えるのである。Charron は信仰と廉直を明瞭に区別し，そうして廉直を信仰のうえにおく。作法とものを考えるすべてを残りなく彼は教えるのであるが，超自然的宗教的な事柄はすべて，こうしたことから除外しているのである。17 世紀の初期にいたると，以上に対する活潑な反動というものが目立ってくる。Du Souhait は <Parfait gentilhomme> なる書のうちで，神学の研究を薦めている。とはいえ，まだ公然とこれを主張しているわけではない。Nervèze は聖 François de Sales と同様，宗教と世俗生活との両者が完全に両立するものと信じている。Faret にあっては，宗教は <honnêteté> を含めて一切の徳の基礎である。そうして Bardin は <honnêtes gens> を作りあげるために，彼の Lycée（学園）において，「人間にかんする知識を扱うとともに，神を崇めるために，特に神についての知を取り扱っている」のである。

だがこうした著作家たちがいたにもかかわらず，すでに Montaigne や Charron に忠実なる <honnêteté> の哲学が準備されつつあったのであり，やがてこれは表面を装いながらも本質は非宗教的なものとなっていったのである。この傾向は，キリスト教を奉ずる Corneille や Descartes にあってさえ認められるところである。つまり，前者はストア主義的傾向が『オラース』や『ポリュークト』に看取されるが，後者にあっても合理主義的性格がその思想に濃厚である。爾余の人たちに到っては，宗教から離れることはさして難事ではなかっ

たのであり，この思潮は Mazarin になると，宗教なるものが政治の道具になり下るのである。フロンドの乱では自由独立の精神が謳歌され，司教たちと修道士たち，ジェズイットとジャンセニスト，これらの人々の間の論争は，自由思想家たちに思想上の漁夫の利を与えたのである。<honnêteté> という概念は，こうして徐々にキリスト教的であることを止める。Caillères にとっては，宗教はもはや第一の地位を占めるものではない。La Mothe de Vayer にいたると，宗教は全然影を潜めてしまう。こうして遂に épicurien にしてパスカルの友 Chevalier de Méré が，姿を現わすのである[3]。

II ≪honnéte homme≫の négatif なる規定

われわれはまず≪honnête homme≫なるものを，これに対立する具体的人物——≪パンセ≫のうちに散見せられる——と対置することによって，négatif に描き出すことにしたい。≪モンテーニュの欠陥は大きい。……彼はおそれなく悔いなく，救いに対する無関心を吹きこむ。≫(63)，≪私はデカルトをゆるすことができない。彼はその哲学全体において，もしできたなら神なしですませようとおもったかもしれぬ。とはいえ世界に動きを与えるには，どうしても神に一と押しさせないわけにはゆかなかったのだ。だがそれをさせてしまった後は，もう神なんぞ彼にはどうでもよいものになってしまっているのである≫(77)，≪アレクサンドルの貞潔の手本は，この人物の酒好きの手本が不節制な人々を拵えたほどに，貞潔なる人々を拵えはしなかった。≫(103)，≪ピュロン派の人々，ストア派の人々，無神論者たち，これらの人々の原理はすべて真である。ただし結論は間違っている。反対の原理もまた真であるからだ。≫(394) 以上の諸断章を通読するときわれわれはパスカルのいわゆる≪honnête homme≫なるものが，飲酒癖のごとき感覚的快楽に囚われることはもちろん，魂の救いに対して無関心であったと，自分の学説のために神を利用するような，そうした人間像にふさわしいものではありえないということを容易に察知するのである。なぜなら，≪honnête homme≫はパスカルにとっていわば理想的人間だったに相違ないからである。しかもパスカル自身がこの理想的人間像の少くとも一部分に参与していると，おもわれるからである。「パスカルが幾何学のエスプリと繊細のエスプリとにかんする反省を書き記したとき，われわれには，パスカルが自分の人柄を自ら心に描いていたと，そう思われるのだ。」[4] ブランシュヴィックはかく述べているが，この二つのエスプリこそは≪honnête homme≫

にとって必須のものなのである。われわれはこのことを知るため，≪honnête homme≫の具体的性格について次に諸断章の示すところに触れねばならない。

Ⅲ　≪honnête homme≫の自然性

≪詩人とか数学者とかそのほかそういう看板をあげなければ，詩に或はそういうものに堪能な人として世間には通用しないものである。ところが Les gens universels は看板を用いない，また詩人の職と刺繍工の職とのあいだにほとんど区別をおかない。Les gens universels は詩人とも幾何学者ともよばれず，そのほかどんな人間ともよばれることはない。だがこれらのもののいずれでもあるのであり，そうしてこれらすべてのものの批判者なのである。Les gens universels は少しも見抜かれることがない。彼は，入った時そこで話されていたことを自分も話題にとって話をする。人々は，彼のもつ特性のうちとりわけ一つどの特性を見るということはない。もっとも必要があって，その特性を用いるときは別だ。そういうとき人々は思いあたる。なぜといって，言葉が話題になっていないときは彼が話に巧みだとは噂されないし，言葉が話題になるときは彼が話に巧みだということは噂になるが，こうしたことはどちらも彼の性質にぞくしていることだからだ。≫(34)，≪数学者だ，説教師だ，雄弁家だといわれないこと，honnête homme だと言われることが大切である。この qualité universelle のみが，私の気に入る。……私はどの性質にも気附かれたくない。……或る一つの性質がきわだち，異名をつけられるのが嫌やだからである。私は話に巧みだとはおもわれたくない。だが巧みに話す必要のある場合は別だ。そのときはそうおもわれたいものだ。≫(35) この二つの断章を熟読玩味するとき，≪gens universels≫と≪honnête homme≫とが，実質上同じものであることは明らかである。≪gens universels≫は詩人や幾何学者やその他のもの，≪これらすべて≫tout cela であるが，他方≪honnête homme≫(本当の人間というもの）は≪qualité universelle≫(往くとして可ならざるはないという性質）を持っているからである。さて≪honnête homme≫ないし≪gens universels≫は，≪看板≫ enseigne をあげることをせず，≪噂される≫ことを嫌い，人目に立つことを避けるものである。つまり必要の場合以外は普通の人々と同じように自然に振舞うのである。それゆえ，われわれはこれを≪honnête homme≫の自然性と呼ぶのである。

ところで≪honnête homme≫は詩人，幾何学者，その他の人々の特性を具え

るものであるかぎり，必然的に≪幾何学のエスプリと繊細のエスプリ≫との両者を合わせ持つものでなければならない[5]。しかもパスカルは次のように記している——≪エピクテトスやモンテーニュやサロモン・ド・チュルシふうの書き方は，最もよく使われ，最もよくしみとおり，最もよく記憶に残り，最もよく引き合いに出されるものである。というのもその書き方は，まったく生活の日常の会話から生れた思想で出来ているからだ。たとえば月が一切のものの原因だという世間に共通の誤謬について話が出ると，人はきっと次のようなことを言うであろう。サロモン・ド・チュルシはいった，或る事柄の真実が分らないとき，そこに共通の誤謬があって……云々と，……≫(18) この断章中の≪サロモン・ド・チュルシ≫Salmon de Tultie とはパスカル自身の偽名であり，パスカルが著名なる数学者であったことを勘考するとき，また上掲の引用断章（34，35）を思い合わせるとき，われわれは上述のブランシュヴィックの言葉がおのずと肯綮に当っているのを知るのである。さらに一歩進めて，≪honnête homme≫とはパスカル自身にとっての理想的人間像であり，パスカル自らの特性が多かれ少かれその一部をなしているものと言うことができよう。≪我々はただプラトンやアリストテレスを教育家の用いるゆったりとした服装においてのみ想像する。この人々だって，友人たちに対してていねいであったし，またほかの人々と同じように笑顔をもって接したのである。そうして『法律学』や『政治学』を書いて楽しんでいたときには，それを遊びながらやったのである。それは，この人々の生涯のうちいちばん哲人的でなくいちばん重大でない時期であった。最も哲人的であった時期は単純に静かに生きていたときである。もしこの人々が政治について書いたとするなら，それはまず狂人病院を整理するためのようなものであったし，またもしこの人々がまるで重要事についてでも語るような様子を見せたとするなら，それは語りかける相手の狂人どもが己れを王か皇帝でもあるかのように考えていることをこの人たちは知っていたからである。この人々は狂人どもの狂気をできるだけよく和らげようとして行き方を共にしたわけだ。≫(331) パスカルがあの数々の≪プロヴァンシャル≫を書いていた時，彼がそれを≪楽しんで≫≪遊びながら≫それをしていたのではないと，誰が言いうるであろうか。また≪狂人病院を整理するためのように≫考えていなかったと，誰が言いうるであろうか。

Ⅳ　≪honnête homme≫の普遍性

≪honnête homme≫が一種の普遍性，しかも総合的普遍性というべきものを具えていることは疑いのないところである。なぜなら彼は≪詩人≫poète であり，≪数学者≫mathémathicien，≪説教師≫ prédicateur であり，かつはまた≪雄弁家≫éloquant，その他でもあるからである(34，35)。しからば≪honnête homme≫なるものは，同時に宗教家，就中キリスト教徒でありうるであろうか。われわれが II において négatif なる規定を述べたところでは，そのようにおもわれる。だがわれわれは≪パンセ≫の一断章において，次の叙述に接するのである——≪神に対して強がることほど卑怯なことはない。彼らはよろしくそういういう不信仰の心を，それをしんから抱きうるほど十分邪悪に生れついた人々にゆずってしまうがよい。彼らはもしキリスト教徒になりえないなら，少くとも honnêtes gens[6] になるべきである……≫(194) 第五≪プロヴァンシャル≫においてわれわれは次の語を見出す。≪「大斎を破らずに，その欲するときに，しかも多量のブドウ酒をのみうるや。可。たとえイポクラテスの酒なりとも。」……なるほど，エスコバルという御仁は honnête homme ですね，と私は申しました。≫[7] これはカズイスト（決疑論者）として当時有名だったエスコバルの俗受けする巧妙な判例に対するパスカルの皮肉であって，文中の≪honnête homme≫が世にいう≪honnête homme≫の意味で[8]，パスカル自身にとっての理想像たる≪honnête homme≫でないことは明らかである。しかし，直前の fr. 194 のそれは，われわれに大きな問題を課している。なぜなら，この場合の≪honnête homme≫が第五≪プロヴァンジャル≫中のものと同じ意味のものとしても（そうして実際そうであるが），なおパスカル自身にとっての一種の理想的人間像たる≪honnête homme≫が，真のクリスチャンとしての宗教的人間と矛盾対立するものであるかどうかということは，われわれにとって目下緊急深刻なる問題だからである。≪honnête homme≫を，科学・芸術・道徳を綜合する理想的人間像に制限することは，ありえないことではない。

しかしわれわれは≪honnête homme≫が，パスカル自身の性格をその属性としていることをすでに見てきた (II)。しかも≪honnête homme≫がパスカル自身にとっての理想的人間像たるかぎり，彼の実生活においてこれに相応しいものたらんと努めたであろうことは想像に難くないのである。特に，禁欲主義者的性格を持ったパスカルにあっては，そうである[9]。したがってわれわれは≪honnête homme≫の一特性たる科学的才能の発揮（科学者としての生活）とキリスト者としての生活とが，パスカルの実生活においてどうであったかを調べることにし度い。もしパスカルが≪honnête homme≫と宗教的人間との間に

本質的差別を設け，相互を排他的に捉えて，後者を前者より高い位置にあるものと考えたならば，彼の晩年の生活においてはキリスト者としての宗教生活のみが営まれ，学者としての研究生活は放棄されていたであろう。彼の宗教生活がポール・ロワイヤル入門（1655年）にはじまり彼の歿年（1662年）まで続いたことは周知の通りであるが，≪パンセ≫の諸断章の大部分が書き始められたのは大体（というのも≪パンセ≫中には≪プロヴァンシャル≫に関係のあるものが若干見出されるからであるが）ヴァシャル論争の後であることは，間違いのないところである。ところでプロヴァンシャル論争の終了は 1657 年であり，この年以後 1658 年の末まで≪パンセ≫の原稿は，彼自身の筆によって書かれ，彼自身の手によって部分的に整理されたのである。「パスカルが彼の草稿分類を止めたのは，1658 年末であることは，われわれには異論を挿む余地のないことのようにおもわれる。分類された草稿中に，作成の日附が 1658 年末以後らしいものは一つとしてわれわれがそれをそうだと決定できるものはないからである。」とラフュマは述べている[10]。これ以後パスカルの病状は彼の死にいたるまで続くのであるが，パスカルがロアンネス公発案による数学上のコンクール（サイクロイドについての数学的問題にかんする）を決意したのは，じつに 1658 年のことなのである。すなわち彼は 1658 年 6 月初めに第一回目の回状を学者たちに送附したのであるが，爾後サイクロイドにかんする自己の論文の最終的補足を書き終った 1659 年 1 月 20 日までの全期間にわたって，パスカルはこの数学的問題に関心を示したのである。かくして≪パンセ≫の断章が書かれ分類されつつあった全期間（1656年 9 月～1658年末）は，また彼が科学者としての生活を営んでいた期間でもあったのである（全期間というのは，パスカルはポール・ロワイヤル入門以前から著名なる科学者であったからである）。

しかしわれわれはさらに一歩を進めたい。ラフュマによれば，『第一写本』(La Première Copie) に記載されている断章全体が 1659 年 1 月以前に書かれたのである。そうして前掲の fr. 194 はじつに 1661 年すなわちパスカル死去の前年に（体力をやや回復した一時期において）書かれたものと推定されるのである[12]。この比較的長い断章（194）中で，パスカルは次のように叙している——≪宗教を攻撃しようとおもうなら，彼らは，あらゆる努力をして到るところをたずねまわり，教会が指示し研究せよとすすめるものさえ手を尽したが，何も満足は得られなかったと叫ぶべきであろう。もし彼らがそう告げるのなら，彼らはじっさい教会の主張の一つを反駁したということになろう。だが，理性を具えた人であって，さようなことを言いうる人はいないということを私はここに

明らかにしたい……≫と。この叙述において，われわれはパスカルが≪理性を具えた人≫personne raisonnable なるものを一応肯定しているのを知るのであり，そうして≪raisonnable≫[13] であることが≪honnête homme≫の属性の一つであることは言うまでもないところである。したがってパスカルは≪honnête homme≫の価値を或る程度認めることになるのであり，このことは同じ断章中の≪彼らはもしキリスト教徒になりえないなら，少くとも honnêtes gens となるべきだ≫という叙述（前出）によっても裏書きされるところである。かように 1661 年の断章にあっても，宗教的精神と honnêteté とは綜合さるべきものないしは前者における後者の止揚ということが暗示されているのであり，≪少くとも≫tout au moins なる表現はこのことを裏書きしていると言いうるであろう。そうしてこの思想は，1659 年 1 月以前にみられるパスカルの思想・実生活の内容と一致している。それゆえわれわれは，われわれ自身の結論を間違いないものとして差しつかえあるまい[14]。

こうしてわれわれにとってはパスカルは，その晩年にあっても，宗教家であると同時に理性を尊重する者であったのである。それゆえわれわれは，パスカルの理想的人間像においても，両者は相互に排他的ないしは二者択一的関係にあるのではなく，内的整合性をもって結びついていたものと見るべきである。すなわち宗教的人間は≪honnête homme≫のうちに，その基本的中核的部分として包容されていたと見るべきである。最後にわれわれは≪honnête homme≫の普遍性の叙述については，次の断章をもってこれを閉ぢたい――≪すべてのものを少しずつ。――人間は，万物抱有の者となって，万物にかんして知りうるかぎりのありとあらゆることがらを知ることはできない以上，すべてのものを少しずつ知ることにしなければならない。なぜといって，一つことについてなんでも知っているより，すべてのことについて幾らかずつ知っているほうが，ずっとりっぱだからである。この普遍性のほうが何よりも立派だ。≫(37)

V　≪honnête homme≫の矛盾性

われわれはIVにおいて≪honnête homme≫が宗教的人間の特性をふくむものであることを見てきた。このことは II において触れた≪honnête homme≫の自然性に対立する性格を≪honnête homme≫自身に附与することになる。なぜならパスカルにとって，真の宗教的人間とは真正のキリスト教徒のことであり，そうしてこのキリスト教自身のうちに≪狂気≫folie という性格が内在している

からである。≪原罪は人々にとっては狂気とせられる。しかしそれは狂気として与えられているのだ。したがって諸君はこの教説に道理の欠けているゆえをもって私を難じてはならぬ。なぜといって私はこの教説を道理なしに存在するものとして説くのであるからだ。だがこの狂気たるや人々の知恵よりも賢いのである。すなわち『人よりも賢し』である。なぜというに，この狂気をぬきにして人間の存在なるものはなんの意味を持ちえようぞ。すべて人間のありかたは感得しがたいこの一点に存しておるのだ。いかにしてこの一点が人間の理性によって認められえようか，というのもこのものは人間の理性に反するものであり，また人間の理性はその方法によって探りあてるどころか，かえってこのものの面前に出るとしりごみしてしまうのであるからには。≫(445)，≪矛盾。この宗教のもつ無限の知恵と狂気≫(588—note 2)。かように≪honnête homme≫の自然性と狂気性とは対立する。またその狂気的信仰と人間理性とは矛盾する。しかしこれらは≪背後の思想≫une pensée derrière la tête において≪ordre≫を与えられているのである。なぜなら人は≪背後の思想を持たなければならない。そうしてこれによって万事を判断しなくてはならない≫(336) からである。≪honnête homme≫は実に一個の≪背後の思想≫を持している。彼は≪規準≫règle を堅持しておる。この背後の思想における内面的統一性こそ，≪honnête homme≫の普遍性と深くつながるものである。形式的ないし論理的矛盾は，彼にあっては問題にならない。だから彼は次のように言うことができたのである——≪矛盾は，ものごとの真であるかどうかを見分けるのには，よくない規準である。確実なことがらで矛盾するものは幾らもある。虚偽のことがらで矛盾なしに通るものも幾らもある。矛盾することが虚偽のしるしでもなく，矛盾しないことが真理のしるしでもないのである≫(384) と。

ポール・ロワイヤに入門したパスカルが第17≪プロヴァンシャル≫のうちで，≪私は……ポール・ロワイヤルに所属する者ではない≫と書いたことは，一つの矛盾である。シュヴァリエによれば，「パスカルをジャンセニスムの味方に引き入れようとする人たちは，この一節を虚言だと言いまた曖昧だとも述べ，かつまたたんなる論争上の掛引きだと称している」[15] が，シュヴァリエ自身は「パスカルはヒュームニズムによってジャンセニスムを和らげたのである。彼はその霊的生活の純粋さと強烈さとによって，ジャンセニムスを超えていた」[16] と言って，これに反対している。われわれはシュヴァリエの所説に賛意を表するとともに，かくのごときパスカルの所言の背後には，彼自身の≪背後の思想≫が，すなわち自分は≪qnalité universelle≫を具えた一個の≪honnête

homme≫なのだという自負があったものと，われわれは見たいのである。

Ⅵ ≪honnête homme≫の実益主義的性格

われわれはここでもパスカルの実生活と≪パンセ≫における諸断章とから，≪honnête homme≫の実用主義的性格を描き出すことにしよう。――≪人を区別するのに，その人の内面の性質によらないで外面で区別するということは，何と尤もなことであろう。我々二人のうちどちらが先へ通るべきか。どちらが座をゆずるべきか。才能のない人のほうか。だが，私も相手も互に劣らず有能だ。そこでお互に争うほかはなくなる。先方は四人の従僕がいる。私の方は一人しかいない。これははっきりしている，数えさえすればよい。譲るべきは私の方だ。もし私が相手と諍うとしたら，私は愚かだ。見よ，このようにして我々のあいだは無事に収まる。これはこの上もない大きな幸せというものだ。≫(219)，≪世に一番不合理なことが，人間の無法のゆえに一番正しいということがある。国家を治めるのに女王の長男を選ぶということほど不条理なことがあろうか。船長に旅客のうち一番家柄のよい人物を選びはしない。さような法律は，笑うべきものであり，かつは不正なるものだ。だが人々はそうであり，またこれからも常にそうであろうからして，この法律は道理ある正しいものとなっている。なぜなら，一番徳のある一番有能なる人物として誰をえらぶべきかということになるからだ。我々の間はたちまち争いとなる。めいめいが我こそはこの一番有徳にして一番有能なる人物だと主張する。だからそんな性質を何か抗弁の余地のないものに結びつけることにしよう。王の長男ということにしよう。これははっきりしている。これは論争の余地がない。理性のなしうるこれが一番良い仕方だ。なぜといって，内乱はこの上もなく大きな禍であるからだ。≫(320)，≪モンテーニュは間違っている。習慣というものは，それが習慣だからだという理由でのみ従うべきであり，習慣が合理的だからだとか正しいからとかというそうした理由で従うべきものではないのだ。ところが民衆はひたすら習慣が正しいとおもうからという理由で習慣に従っている。正しいとおもわないといくら習慣でももう従おうとはしない。おもうに民衆は道理か正義かにしか従うのを好まぬからである。習慣は，そういうものを持たないと，圧制的なものに受け取られるかも知れない。だがこうした道理や正義の支配力というものは，快楽の支配力ほど圧制的というわけではない。これらは人間にとって，自然的な法則なのである。だから法律や習慣に，それがきまりだ

からという理由で従うのはよいことなのだ。≫(325) われわれはこれらの断章のうちに，実際的利益ないし効果を重んずるパスカルの思想を読み取りうるのであるが，かような思想はまた或る貴族の子弟に助言を与えるためになされたパスカルの『三つの講話』（一部前出，註14参照）にも見られるところである[17]。だが彼の実益主義の精神は，彼自身による計算器・水圧機・手押車・樽運搬車の発明や乗合馬車の事業をも一貫するところのものである[18]。

パスカルの実益主義的思想は，さらに次の諸断章からもこれを推察しうる。≪……数学は深遠なるがゆえに無益である。≫(61)，≪理性はじっさい十分に理性的であるからして，いまだに確実なものを少しも見出しえないでいることを告白している。≫(73)，≪人は誠意をもってまじめに語るかぎり自然の諸原理はこれを疑いえないとする独断論者のもつただ一つの強み，これだけを私は扱うことにする。がこの一点を駁するピュロンの徒は，一言にしていえば我々の起原の不確実ということを打ち立てるのだ，……≫(434)。われわれはこれらの叙述のうちに，合理主義・論理主義・独断論に対するパスカルの批判を読み取ることができる。このことはこれらの反対物，すなわちボダンのいわゆる「パスカルのプラグマティスム」pragmatisme pascalien を示すものでなければならない。かかる＜pragmatisme＞は，ボダンによれば，モンテーニュが古代のソフイスト，エピキュリヤン，懐疑論者たちから受けついだものであり，17 世紀の＜honnêtes gens＞や自由思想家たちは，さらにこれをパスカルとともにモンテーニュ自身から引き継いだのである[19]。われわれはこの意味における実用主義を，例えばあの有名なパスカルの≪pari≫の断章（233）のうちに看取しうるのである。すなわちわれわれはボダンとともに，「賭の弁証法」La dialectique du pari は「パスカル的パラグマティスムの最終的形態」La dernière forme du pragmatisme pascalien であると言いうるであろう[20]。かくてわれわれは以上を通じて，実益主義的性格が≪honnête homme≫の性格をも特徴づけていると見てさしつかえあるまい。

Ⅶ　≪honnête homme≫の普遍性の内容

III においてわれわれは≪honnête homme≫の普遍性について主として形式的に触れてきたのであるが，われわれはこの章において，普遍性の具体的内容について≪パンセ≫の語るところを拾集して，これを掲げることにしたい。普遍的性格は種々の形ちであらわれているが，これに共通なる点はただ一つの点

にとどまることなく，これに対立するものをも包容して調和，結合しようとすること，ないしはこれらを綜合，統一しようとする点にあるのである。（1）宗教と理性の調和。≪人々は宗教をきらい宗教が真理でなければよいのにとおもっている。これを直すにはまず宗教が少くも理性に反するものではないことを明らかにし，……≫(187)。（2）内面と外面との結合。≪神より享けるためには外面が内面に結びつかなければならない。つまり跪まずく，口で祈りを唱える。外面を内面に結びつけようと望まないのは，高慢である。≫(250)。（3）信仰と感性との調和。≪信仰は感性のいわないことをいう。しかし感性の見るところと反対のことは言わない。信仰は感性を超えている，だが感性に反するものではないのだ。≫(265)。（4）中間的包容性。≪人間の魂の偉大さは，中間にとどまることを知る点にある。偉大さはそこからはずれることにあるどころか，反ってそこから少しもはずれぬことに存するのだ。≫(378) パスカルのいわゆる≪中間者≫le milieu とは，ダンヂェールによれば，「その両極限を保持しつつ両者の中間を充足すべき人間」であるが，パスカルにおいて中間者が「その両極限を保持する」tenir les deux extrêmes ところのものであることは，われわれにとって極めて意味深いと言わねばならない[21]。（5）独断論とピュロニスムとの止揚統一。≪我々は証明するということにおいて無能力である，これにはいかなる独断論も打ち克つことができない。我々は真理の観念をもっている。これにはいかなるピュロニスムも打ち勝つことができない。≫(395) この断章は対立する両者を止揚統一する高次の立場――キリスト教――を暗示するものである。このかぎりわれわれは，思想上の一種の普遍的性格というものを看取できるのである。（6）悲惨と偉大との承認。≪悲惨は偉大から結論せられ，偉大はまた悲惨から結論せられるから，或る人々は悲惨を偉大の証拠として用いれば用いるほどそれだけいっそう悲惨をつよく結論することができたし，また或る人々は偉大をほかでもない悲惨から由来するものとして論ずれば論ずるほど，それだけいっそう偉大をつよく結論することができたのである……≫(416)（7）≪秩序≫としての普遍性。≪世俗的に偉大なるものの持ついかなる光輝も，精神的探求にたずさわる人々の前には光を放たない。精神的なる人々の偉大さは，王にも富者にも主長にも，これらすべて肉的に偉大なる者たちには見えない。神にぞくするのでなければ無に等しい智慧の偉大さは，肉的なる人々にも精神的なる人々にも見えはせぬ。これらは種類を異にする三つの ordres である。≫(793)。

われわれは最後に，以上の普遍的性質こ連関しつつしかもこれらの基底とな

るべきパスカルにおける——したがって≪honnête homme≫にふさわしい——最も根本的なる普遍性というべきもの，すなわち内的超越としての普遍性について，少しく触れておきたい。内的超越とは宇宙を≪包容する≫ comprendre ことである。それは自己を否定し，自我を超えて≪universel≫となることである。パスカルはロアンネス嬢宛の書簡中で次のごとく述べている。≪現在だけが，真に私たちにぞくする唯一の時，私たちが神にしたがって用いなければならない唯一の時なのです。私たちの思いをもっぱら凝らさねばならないのは，まさにこの時に対してです。けれども世の人々はひたすら不安であるがために，現在のこの生活，自分の生きているこの瞬間に，ほとんど思いをいたすことがなく，かえって自分の生きるであろう時に思いをかけている始末です。したがって，人はつねに未来に生きているような有様で，決して現に生きているとは言えません≫と[22]。また彼は断章 172 においても，次のごとく書き記している——≪我々は少しも現在の時におちつかない。我々は，未来のやって来るのがあまりにもおそすぎるかのように，その歩みをせきたてるためでもあるかのようにこれを待ちのぞむ。また過去を，去るのがあまりにも早すぎるのでその歩みをひきとめるためでもあるかのようにこれを想い返すのだ。浅慮なる我々は，我々の所有せぬ時のなかをさ迷い，我々のただ一つの所有である時におもいを致そうとはせぬのである。むなしい我々はもはや無い時のことをおもい，現存するただ一つの時を無反省に見のがしてしまうのだ。≫まことにわれわれは，この≪現在≫ le présent，この≪瞬間≫ l'instant にこそ思を凝らさねばならないのである。なぜなら≪神の国は我々のうちにある。普遍的なる善は，我々のうちにあり，我々自身であり，しかも我々ではない≫(485) ゆえである。そうであるからして人が真理に対して≪honnête≫であるときは，すなわち人が真に生きているときは，≪いたるところが中心であり，どこにも周辺をば有さぬ球体≫(72) のうちに——いたるところが瞬間である永遠のうちに，≪folie≫(338) となって物になりきっているときである。かように，≪単純に≫simplement (331) 生きておるときである。（完）

（註）

（1） Brunschvicg, Pascal. Pensées et opuscules, p. 334, note 1.

（2） ibid.

（3） 以上の叙述はすべて J.-E. d'Angers, Pascal et ses précurseurs, Paris, 1954, p. 24—25 に拠る。

（4） Brunsch., Blaise Pascal, Paris 1953, p. 151.

（5） この二つのエスプリについては，fr. 1～4 を参照のこと。

（6） honnêtes gens は honnête homme の複数形であって，honnêtes hommes という言い方は，当時の習慣上用いなかった。

（7） Pascal, OEuvres Complètes établis par J. Chevalier(Bibliothéque de la Pléiade), p. 708.

（8） この意味における≪honnête homme≫という語は，パスカルの≪貴族の身分にかんする三つの講話≫中の第二および第三講話においても見られる（Brunsch., Pascal. Pensées et opuscules, Trois discours sur la condition des grands, p. 236, 238)。また就中 1660 年8月 10 日附のフエルマ宛書簡中において，パスカルが≪honnêteté≫を尊重していることは，周知のごとくである。だがわれわれは，パスカルが世に謂う<honnête homme>の背後にパスカル自身の≪honnête homme≫の概念を潜ませていることに留意すべきである。

（9） Voir Mme Périer, La vie de Monsieur Pascal (Bibliothéque de la Pléiade, p. 13—34)

(10) L. Lafuma, Controverses pascaliennes, Paris, 1952, p. 43.

(11) Lafuma, B. Pascal. Pensées sur la religion (Editions du Luxembourg), Paris, 1951, Textes, p. 14.

(12) Lafuma, Controverses pascaliennes, p. 86.

(13) Gaston Cayrou, Le Français Classique(lexique de la langue du dix-septième siècle, p. 730) は，<raisonnable>なる語を《Qui est pourvu de raison》, en parlant des personnes. と説明している。

(14) 1659 年以降のパスカルの思想において，科学的研究の意義をまったく否定して宗教生活のみにたずさわるべきだという変化が起ったか否かという問題にかんして，パスカルがこの年代以後その実生活において科学的研究を行ったという文献上の証拠を発見することはできない。しかしまた逆に，叙上の思想的変化が起ったという確証も存しない。むしろ本文中において触れた 1661 年代の断章（194）の示すところは，われわれの結論を支持するようにおもわれる。しかしラフュマがわれわれのために紹介している Beurrier 師の『回想録』（第三巻，40 章）の一節は，なお問題となりうるであろう。師は次のごとく述べている――「……氏〔パスカル〕の逝去する2年前……氏は，氏の馬車，馬，刺繍織物，立派な家具，銀器それから蔵書さえ売り払ったのである。聖書や聖アウグステイヌスの著作，その他ごく僅かのものを残して。こうして出来た金銭全部を，氏は貧乏人たちに与えたのである……」[1]と。パスカルのこの慈善は 1660 年の末に行われたのであろうと，ラフュマは推定しているが[2]，聖書やアウグステイヌスの著作，その他僅少のもの以外を売り払ったという事実は，上記の思想的変化が起った

ことを示していると解されなくはない。

しかし同じく 1660 年末頃に行われたと推定される[3]『貴族の身分にかんする三つの講話』（P. Nicole の筆になる）中の『第二講話』において，パスカルは次のように述べている――≪あなたが公爵であるからといって，私はあなたに敬意を払う要はない。ただあなたに敬礼すればことは足りるのだ。もしあなたが公爵であり，かつ honnête homme であるとするなら，その資格の双方にたいして，私は払うべきものを当然払うであろう。あなたの公爵の資格にたいして相応しい儀礼をも，honnête homme たることに対して当然払うべき敬意をも，ともに決して拒むことはないであろう≫と[4]。この一節は明らかに≪honnête homme≫の価値を彼が無視してはいないということを示している。そうして≪honnête homme≫が教養の士すなわち理性や科学的研究を尊重する者であるかぎり，パスカルはなお一面においてこれらのものを認めていたと，われわれは推測せざるをえないのである。しかも上述の蔵書売却の理由については，これを純粋に慈善のためと解しうるのであって，パスカルの思想の実益主義的性格（本文 VI を参照）を顧るとき，われわれの見解はますます現実性を帯びてくるのである。なぜなら科学的研究の物質的成果は，これを貧民ないし民衆のために利用しうることは見易い道理だからである（そうしてこのことがキリスト教の実践的精神と合致することは言うまでもない）。ではなぜ 1659 年以降パスカルの実生活において，科学的研究が見出されなかったかといえば，それは彼の病状によるのだと解することができる。なぜなら断章の分類綴（liasse）の作成は，1658 年末以後中絶のままにとどまっているからである。すなわち 1659 年から 1662 年にいたる期間のパスカルの生活状態にかんして，従来の所説を覆えすラフュマの考証の結果は，われわれに＜de 1659 à 1662 son activité intellectuelle fut très réduite.＞なることを教えているのである[5]。それゆえわれわれは，≪二つの行き過ぎ。理性を排除してしまうことと，理性のみしか認めぬということ。≫（253――傍点は論者）のうちにうかがわれるキリスト教的中庸の立場こそ，パスカルの晩年をも一貫していたと推測するのである。

1）Lafuma, Controverses pascaliennes, p. 153.

2）ibid.

3）Lafuma, Opuscules et lettres de Pascal, Aubier, Editions Montaigne, 1955, p. 164.

4）ibid., p. 169.

5）Lafuma, Controverses pascaliennes, p. 15.

(15) J. Chevalier, Pascal, Paris. 1949, p. 97.

(16) ibid., p. 99.

(17) Voir Brunsch., Pascal. Pensées et opuscules, XXII. Trois discours sur la condition des grands, p. 231—235.

(18) Voir Chevalier, op. cit., p. 145.

(19) E. Baudin La philosophie de Pascal, Neuchâtel, 1946, t. II, p. 133.

(20) ibid., p. 146.

(21) J.-E. d'Angers, Pascal et ses précurseurs, Paris, 1954, p. 218.

(22) Brunsch., Pensées et opuscules, p. 223.

附記——断章番号および fr. 588, note 2 は，すべて Ed. Brunschvicg に拠る。(註了)